

Davos Nextにかかわる人々の声を届けるインタビュー。第二弾では、Davos Nextを締引理事長と共に牽引している辻村清行さんに、このプロジェクトに寄せる思いを聞きました。

穏やかな表情から発せられる率直なことばには、現代日本に対する強い危機感がにじみ出ていました。

(只木良枝)



第3回
JOES Davos Nextを語る

東京大学大学院情報学環客員教授

辻村清行さん

なぜ「未来世代」の子どもたちの教育に興味を？

現代は答のない時代といわれています。自分ひとりで答を出すことはできないし、本やネットに正解が書いてあるわけでもありません。結局は、違う意見を持つ人と議論しながら、自分なりの考えをつくっていくプロセスが必要です。しかし、答のない問を議論することには、日本人は慣れていません。学校では、素早く正解を導き出す力が評価されがちです。議論のためには前提となる知識が必要ですから、そのための教育を否定しているわけではありません。要する

にバランスなんです。

もう一つ、日本の発信力が弱まっていることへの危機感です。

一九八〇年代は日本経済が世界でもはやされましたが、その後どんどん日本の存在感が小さくなっていきます。日本人の考え方、日本としての意見を論理的に冷静に堂々と世界で発言していくことが必要です。日本人のアイデンティティを持って自分たちの考えを発信していける人材を育てなくてはいけないと思っています。

自分の考えを発信する力や違う考えの人と議論する力は、小さいころから繰り返し実践していかないと身につけません。大学生や社会人では遅すぎるかもしれませんが、ならばさらに若い世代はどうだろうか。そんなことを締引理事長と話すうちに、Davos Nextの構想ができました。「将来ダボス会議に出席し自分の考えや日本の主張を発言してくれる人材が出てくれればうれしいね」と話しています。

対象は、世界中の日本人の子どもたちですね。

日本人学校や補習授業校の児童生徒だけではなく、世界中の日本人の子どもを対象にしたいと、最

初から考えていました。みんな、日本人というアイデンティティを背負って未来を生きていくのですから。

僕の子ども時代はまだ日本が貧しく、親は自分の生活で精いっぱい、子どもは自然のなかでいろんな環境の子と勝手に遊び、もまれていました。いまの日本は、そのころに比べると子どもたちの数もずいぶんと少なくなり環境も均質化しているように思います。

海外にいる子どもたちは、それぞれの国、地域でそれぞれの教育を受けている。さらに、日本の文化や考え方と違う環境にいる。その多様な環境にいる子どもたちが講演に刺激され、共通のテーマについて語り合い、お互いの違いを知り、自分の考えを深めていく。そんな機会を提供したいのです。

開催を待っている子どもたちに、メッセージをお願いします。

Davos Nextは初めての試みで、これも「正解がない」こと。だから参加者からの積極的なフィードバックが欲しいのです。そうして来年度以降も続いていくDavos Nextを、みんなが価値あるものにしていきたいと思っています。